

アントン・チェーホフとレフ・トルストイの作品における 記憶の描写

覚張 シルビア

はじめに

チェーホフは無神論者であったが、この世に存在する信仰の中でトルストイの信仰が最も自分に近く、相応しいと考えていた。¹ また「人は神を心から信じるべきであり」、信仰がなければ、ただひたすら探求すべきだと記している。² チェーホフの主人公たちは、この世界にうんざりし、重苦しさを感じると、存在の意味を刷新するために逃亡、或いは探求の旅に出るが、その目的地は、精神的なものと物理的なものとが出会う世界の精神的中心であると、ダリア・キルジャーノフは考察する。³ それは、彼らなりの信仰の探求ともいえるだろう。

チェーホフが描く人物たちは、しばしば人生において重要なものを失った、そして過去にこそ真の人生があったという感覚を抱きつつ生きている。そのためか、この作家の作品には、回想の場面が多く見られる。彼らは、自分の存在の根拠を過去のうちに、そしてその過去との関係性のうちに求めるのである。つまり、彼らは自身の生きる意味を求めて過去を思い出すことで、真の信仰の獲得を希求していると考えられる。他方トルストイにとっては、神との一体性は、過去と未来、つまり永遠性をも包含する現在のうちにある。⁴

本論においては、チェーホフとトルストイの作品において描かれる記憶、回想のあり方を通し、その関係性を明らかにしたい。

1. 意識における過去と現在

チェーホフの『退屈な話』とトルストイの『イワン・イリイチの死』では、死を初

¹ Чехов А.П. Полное собрание сочинений и писем в 30 томах. М., 1974-1983. Письма. Т. 9. С. 28. これより先、チェーホフ 30 巻全集の作品からの引用は本文中で (巻号, 頁数) によって示す。

² Чехов. Полное собрание сочинений и писем. Письма. Т. 10. С. 142.

³ Daria A. Kirjanov, *Chekhov and the Poetics of Memory* (New York: Peter Lang Publishing, 2000), p. 13.

⁴ Kirjanov, *Chekhov and the Poetics of Memory*, p. 15; Густафсон Р.Ф. Обитатель и чужак. СПб., 2003. С. 277-333.

めて意識し、まだそれを受け入れられない人間、つまり神の不在を前にした人間の人生が振り返って語られる。記憶で甦る人生は、実際の人生と必ずしも合致するものではないが、それにもかかわらず、作風の異なる二人の作家の作品において、主人公が記憶を通して人生と向き合い、死に眼差しを向けていくことは興味深い。⁵

キルジャーノフによれば、『退屈な話』の主人公ニコライ・スチュパーノヴィチ教授は、過去を振り返ることで現在を刷新し、以前の自分と現在の自分の連続性を復活させようとするが、それは状況をさらに悪化させる。変化に直面した結果、自己の再生が容易になるどころか、むしろ、現在からより疎遠になったというのである。⁶ 30年前も死を控えた現在も、そして死後もただ科学だけに興味があるという点では、教授は一貫しており、その意味では、彼にとって生と死の境界はないようにも見える。その一方で、半年後の死を自覚した教授は、自分の家族に対して無関心となり、唯一、子供の時から現在に至るまで大切な存在であり続けるカーチャの愛すら受け入れることができない。死を前に、過去を振り返ることで自身の存在の本質を理解しようとしながらも、彼の存在を構成していた名声や名前などの外面的な要素は、彼自身から遊離し、抜け殻のような意識だけが残っている。主人公はカーチャに、自分の過去について詳細に語りながら、それが記憶に残っていたことに驚いているが、それは彼にとって、その過去が自身の一部として認識されていないことを示唆する。

私がカーチャに自分の過去について語る時、まことに驚くべきことに、自分でも記憶に残っているとは思ひもしなかった詳細について、彼女に話しているのである。(7, 283)

イワン・イリイチも死を前にして人生を振り返るが、興味深いのは、彼が病気の原因となる怪我を負った部屋でアルバムを手にする場面である。

最近、彼自身がしつらえた客間、彼がそこで落ち [...], それをしつらえるために命を犠

⁵ 『退屈な話』が出版された当初、これはトルストイの『イワン・イリイチの死』の影響下で書かれた、或いはその明らかな模倣であるという見方がなされた。しかし、アレクサンドル・チュダコフは、死を宣告された主人公の目に、全人生が映し出され、その評価が下されるという共通の筋立てゆえに、批評家が誤った見方をしたと指摘する。イワン・イリイチが、人間にとっての一般的運命の象徴であるのに対し、チャーホフの教授は、普遍性をもたない個人であり、この人物の自己分析は、トルストイ的な自己省察、自己分析とは異なるのだという。(Чудаков А.П. «Толстовский эпизод» в поэтике Чехова // Опульская Л.Д., Паперный З.С., Шаталов С.Е. (ред.) Чехов и Лев Толстой. М., 1980. С. 182-184.)

⁶ Kirjanov, *Chekhov and the Poetics of Memory*, p. 119.

性にした客間——というのも、彼の病気はこの打撲から始まったと分かっていたから——に入ると、ニス塗りのテーブルの上に何かで切られた痕を目にすることがあった。彼は原因を探し、それが端がめくれ上がったアルバムの銅飾りだと分かった。彼は、その大切な、丹精込めて作ったアルバムを手にとり、娘とその友達のぞんざいさに腹を立てた。破れた場所があったり、写真が逆さまになったりしていたのだ。彼は、熱心にそれらを直し、再び装飾を直すのだった。⁷

彼の病気の原因となった部屋にあり、家族からぞんざいに扱われているアルバムは、あたかも、自分自身の生きることで創造してきた、そして家族には十分に評価されていない過去と差し迫る死の関係を暗示するようだ。皮肉にも、アルバムによって象徴される彼の過去は、死の直接的原因となる部屋に置かれていることで、現在との連続性を保っている。彼は朦朧とする意識の中、黒い袋に押し込まれる感覚を経験すると、自身の無力さ、孤独、人々の残酷さ、神の残酷さ、そして神の不在を嘆くが、それでも生きるために、自分の人生で最高の時を思い出していく。

彼は想像の中で、自分の楽しい人生のうち最もよい瞬間を思い出していった。だが奇妙なことに、この最もよい瞬間のすべてが、今では、その当時とは全く違って見えたのである。幼年時代の最初の頃を除くすべてが。その頃、幼年時代には、もし取り戻すことができれば、それによって生きられたであろう快いものが実際にあったのだ。しかし、この快いものを経験した人間は、もはやいなかった。それは誰か別人についての思い出であるかのようだった。(T26, 106)

そして、恋の思い出など例外はあるものの、幼年時代から遠ざかれば遠ざかる程、人生の喜びは疑わしい、ちっぽけなものとなり、少なくなっていく。イワン・イリイチにとっても、チェーホフの教授と同様、過去の思い出は他者に属するものとなり、すでに現在と過去との断絶が感じられる。彼は、孤独の中で現在と過去の記憶を比較する。そして、再び黒い袋の中に押し込まれる夢を見た時、自分の人生はよかったのだという意識が、穴へと落ちるのを妨げた。彼にとって本当によかったのは幼年時代だけだが、しかし、この時代の記憶が、彼が穴へ落ちるのを引き止めたとは考えにくい。むしろ、生の価値が疑わしい時代を正当化しようとする意識が彼を引き止めてい

⁷ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. М., 1992. Т. 26. С. 94. これより先、トルストイ 90 巻全集からの引用は (T 巻号, 頁数) で示す。

たというべきだろう。イワン・イリイチは、自分に対して無関心な家族のうちに自分自身と同じ誤った人生を見出し、ただ下男のゲラシムだけは例外と捉え、中学生の息子のうちにも自分に対する同情を感じ取った。彼は「眠そうで善良そうな、頬骨の出たゲラシムの顔」(T26, 110)を見た時、物心ついてからの自分の人生は誤りだったと気づき、その誤った人生を生きるのを止めるために黒い穴の奥へと抜けるが、それによって単に死が終わったのではなく、死が消失したとさえいえよう。この時、ゲラシムと一緒に彼を黒い袋へ押し込んでくれるのは、むしろ、自分の現在の生の方向性の誤りに気づかせてくれた記憶、つまり、彼の人生のうちで唯一正しかった幼年時代の記憶だと考えられる。それを象徴するかのように、彼が穴へと落ち光を見る瞬間、その手は家族で一番幼い息子の頭に置かれている。最後まで、自分の家族に対する無関心に怖気をふるい、カーチャの存在を受け入れようとしない『退屈な話』の主人公に対し、家族を憎みながらもゲラシムの存在を受け入れ、誤った生であっても現在を生き続ける家族を苦しめないために自ら死に進むイワン・イリイチは、生きながらの死、つまり精神的な死を乗り越えることで、生を刷新したといえる。

2. 共通の記憶

『退屈な話』で描かれる記憶は、主人公を取り巻いていた外的な覆いを剥がすことで、彼に虚無感すら抱かせ、肉体的な死のみならず、精神的な死へと追いやった。しかし、チャーホフの作品でも、常に記憶が無力である、或いは否定的な力を持つわけではない。『曠野』のエゴールシカは、周囲の大人たちの昔話を聞きながら、彼らが皆「輝かしい過去を持ち、現在は芳しくない」(7, 64) 人々であると認識する。そして、「ロシア人が思い出すのは好きだが、生きるのは好きではない」(7, 64) こと、つまり記憶によって生きていることをまだ知らぬまま、幼く自分自身の記憶は少ないものの、実話とも作り話ともつかぬ話を聴きながら、人々に共通するより大きな記憶の世界に取り込まれている。⁸ 小さな主人公は、自然とこの大きな基盤を持つ記憶を通して、見知らぬ大人たちと心を通わせていく。『大学生』は、チャーホフをトルストイに近づける作品であると同時に、チャーホフ自身が好きな作品でもあり、この事実自体が、チャーホフはペシミストではないことを示しているという。⁹ フョードル・バーチュ

⁸ グローモフによれば、この作品では、人間が血肉と共に遠い祖先から受け継ぎ、成長すると共に失われる原初的記憶が描かれている。幼年時代には、おとぎ話や英雄叙事詩の方が真実や実話より重要で、想像上の話の方が現実よりも確実であり、それゆえ、真の歴史的・詩的過去を持つのは、主人公である子供だという。(Громов М.П. Книга о Чехове. М., 1989. С. 198-199.)

⁹ Чехов. Полное собрание сочинений. Т. 8. С. 504-507.

シコフによれば、チェーホフの初期作品は「偶然の、個々の孤立した現象」から成り立っており、人生の現象における因果関係、つまり過去と現在の関係は失われていた。¹⁰ 後の作品においても、チェーホフの作品ではしばしば偶然性が強く感じられるが、『大学生』では、過去と現在を結ぶ因果関係が強く感じられる。しかも、それは物質的な因果関係というよりは、より精神的なものである。寒い夜に焚き木をする寡婦の母娘に出会った大学生は、12世紀前にも使徒ペテロが焚き木に当たっていたことを思い出し、彼らに歴史的出来事について物語る。母ヴァシリーサが涙を見せると、大学生は、過去と現在の連続性を実感する。

突然、彼の心に喜びがこみ上げ、息をつくために一瞬立ち止まらなければならなかった。彼は、過去は現在と、[...] 出来事の連鎖によって切れ目なくつながっていると考えた。そして彼には、今しがた、この連鎖の両端を見たように思われたのだ... (8, 309)

この過去は自分の内面に根差すものではなく、外面的なものであるが、それでも現在と過去の連続性を感じ取った大学生は幸福の予感に捉えられる。その結果、チェーホフの他の多くの主人公たちとは異なり、人生は素晴らしい、奇跡のような、気高い意味に満ちたものだと考えるのである。

『戦争と平和』の主人公ピエール・ベズーホフは、ドーロホフとの決闘後にエレンと口論になり家を出るが、その際、トルジョークの駅で出発を待つ間、自身の状況を、周囲の人間や歴史的人物と照らし合わせながら理解しようとする。それによって彼の精神的問題が解決することはないが、フリーメーソンの師匠となるバズデーエフと出会うことで、一時的にはあるが、宗教的な解決の糸口が見つかる可能性が現れる。しかしフリーメーソンに入った後も、ピエールの生活の本質は変わらず、歴史的な考察もバズデーエフとの出会いも、『大学生』の主人公のような幸福感をピエールに与えることはない。この場面に関する限り、トルストイの主人公にとって歴史的な過去とのつながりは、それほど大きな意味を持たないようだ。ここで、ピエールが思い起こすのは、過去の時代の異国の人物たちであり、ピエールはその歴史の一部とはなり得ない。ここで彼が目にする民衆も、階級や生活状況の異なる人々であり、自分の精神的苦痛と彼らの苦痛を、同次元では捉えることができない。つまり、苦しみを通して民衆や歴史的人物と一体化するようでありながら、実はそうではないのだ。チェーホフの大学生とは違い、過去と現在との外面的な関係がピエールを満足させることはない。

¹⁰ Там же. С. 506.

3. 過去から現在へ——蓄積としての記憶

ピエールが、常に漠然と胸に抱いていた精神的問題を解決するのは、ナポレオンと対決するためにモスクワの町に出て、捕虜となってからのことである。ここで彼は、文字通りに歴史的プロセスの一部となり、カラターエフと出会い、民衆の一部となる。その状況で空を見上げ、「すべては自分のうちにある」と確信するピエールは、自然の一部ともなる。ピエールが捕虜となる直前の場面について、グスタフソンは次のように考察する。ロシアを救うためにナポレオンを倒そうと外に出たピエールは、しかし、その決行を後回しにして火事の中から子供を助け出し、アルメニア美女を守ろうとする。その結果、ピエールは捕虜となるが、彼がここで「犠牲にしたのは自分自身ではなく、自分の意図、創り出された<自分>のイメージである。彼はいわば、本当の自分を発見するために人生を失う。」つまり、ピエールにとっての真の「自分」とは、敵を殺す行為も可能な人間性ではなく、「今、ここにいる隣人のために身を差し出す行為なのである。」¹¹ 一見すると、トルストイの主人公は、記憶に根差した自己の意識を現在の前ではいとも簡単に放棄してしまっているようであり、過去は現在以上の力を持たないように見える。しかしトルストイ自身、「<私>は常に同じであるということが意識を作り、<私>は絶えず異なる人間であるということが時間と空間を作る」(T55, 247) と考えており、それに基づき、オリガ・スリヴィツカヤは次のように結論する。「つまり人間は、その縮小された姿のうちに大きな可能性を孕んでいるということになる。人間はその姿以上に広く、深い存在なのである」と。¹² それに従えば、現在の行為も本質的には蓄積された内面によって準備されていたということになる。ピエールが捉えられていた閉塞感から脱するには、外的な記憶によって歴史の中で自分を位置づけることは不十分で、行動によって歴史の一部となる必要があった。だが、その行動もまた、遠い過去から連綿と続く記憶によって創出されたというべきなのである。ピエールに比べると、『大学生』の主人公が経験した一体感は、彼自身の記憶に根差しているとは言い難く、より観念的である。そのためか、この後、大学生が感じている幸福感が、実生活の中で維持される強度を持つか否かは、定かでない。

『大学生』に比べ、より現実的な次元で、記憶がトルストイの役割を果たしているチェーホフの作品は『職務の用事で』である。解剖のために僻地の村へやってきた予審判事のルイジンにとっては、すべてが意味を持つ文化的空間とすべてが無意味である僻地とに分かれていた。しかし到着した日の夜、夢の中で、自殺した保険代理人レ

¹¹ *Густафсон. Обитатель и Чужак. С. 285.*

¹² *Сливицкая О.В. «Война и мир» Л. Н. Толстого : Проблемы человеческого общения. Л., 1988. С. 12.*

スニツキーの遺体が置かれた郡の集会所と自分が宿泊している賑やかなタウニツ家、そして吹雪の中を行くレスニツキーおよび下級警吏のロシャディンと居心地のよい部屋で休む自分の記憶が対照的に浮かび上がり、すべては偶然でないことに思い至る。僻地にあっても、すべては偶然ではなく、何事にも関連性があることに気づくのである。背景は壮大な歴史的世界ではないものの、レイジンが、観念的レベルではなく、自身の体験によってそれを理解したことは、彼をトルストイの主人公に近づける。とはいえ、レイジンの夢の中で再構成される記憶は、現在に近い過去の記憶であり、これは、他者との関係の本質を理解する助けとはなかったが、ピエールの集積された記憶のように、彼の現在の生に働きかける力を持つかどうかは不明のままだ。

4. 存在基盤としての記憶

『僧正』の主人公は、トルストイの主人公同様、過去の遠い記憶を通して他者との一体化を経験する。修道院での徹夜禱の最中に9年間も会っていなかった母親と思われる人物を目にすると、彼は思わず涙を流す。すると参列者も次から次へと涙を流し始め、教会全体が静かな泣き声で満たされていった。参列者のうちに母親という自身の人生における過去の重要な存在を目にし、記憶が甦った結果、それまで皆同じような顔に見えた参列者たちとの連帯感が生じるようだ。彼の存在は、自分自身の過去の記憶だけではなく、一族全体の過去との関係でも位置づけられる。主人公は、代々続く聖職者の家系であり、彼の人生もその永遠に続くプロセスの一環のように捉えられている。

そして読経しながら、彼は時折、目を上げ、両側に広がる火の海を見、ろうそくがぱちぱちとはぜる音を聞いた。しかし去年までと同様、人々は見えなかった。幼年時代や青年時代と同じ人々がいて、これからも毎年[...]同じ人々が来るように思われた。

彼の父は輔祭で、祖父は司祭、曾祖父も輔祭だった。そして彼の一族全員が、もしかすると、ルーシでキリスト教が受容されて以来、聖職についていたのかもしれない。彼の教会での勤行や聖職者、鐘の音に対する愛は、生まれながらの深い、根絶しがたいものだったのだ……(10, 198)

彼の存在は、過去を通して周囲と一体感を獲得するばかりでなく、永遠性をも獲得する。しかしその一方で、過去の記憶が不確実となる時、その存在自体も揺らぎ始める。

懐かしく大切な、忘れることのできない幼年時代！なぜ、この永遠に去り、戻ることのない時は、それはなぜ、実際以上に明るく、晴れやかで豊かに見えるのだろうか。[...] そして今では、祈りと思い出が混ざり合っていた。(10, 188)

さらに、彼が亡くなり、新しい主教が任命され、誰もピョートルのことを思い出さなくなると、母親の記憶の中でもその存在の価値が危うくなる。

そして今は、へんぴな田舎の小さな町で娘婿の輔祭の家に住む、故人の母親である老婦人だけが、夕方近く、自分の牝牛を迎えるため放牧場で他の女性たちと出くわす時に、子供や孫たち、主教だった息子がいたことについて語り出すのだった。その際、信じてもらえないのではないかと、おどおどしながら話すのであった……

そして実際、皆が彼女を信じたわけではなかった。(10, 201)

教会での勤行の後、外に出たピョートルは、修道院の壁や月を近づき難いものと捉えているが、自分が住む地域に入り、その立場から解放されると、周りの自然を身近に感じている。このことにも、彼自身が自分の存在とその身を包む地位の間に齟齬を感じていることがうかがえるが、母親の記憶においても、主教としての息子の存在は揺らぎを免れない。

チェーホフの主人公たちは、年齢を重ね、職務や役職の中で生きる時間が多くなるにつれて、存在の基盤としての幼年時代の記憶は不確実なものとなり、それと共に存在そのものが偶然に左右されるものとなっていく。現実とは異なり、実際以上によく見える幼年時代の記憶は、トルストイの主人公が遡る記憶と違い、存在を刷新させる力を持たないようだ。他方、トルストイの作品では、幼年時代の記憶はどのように描かれているだろうか。例えば、グスタフソンによれば、夢うつつの状態で「しみ」を意味するフランス語からナターシャを連想するニコライ・ロストフは、「戦争と平和の間で、死と隣り合わせの<ここ>と、ロストフが自分の本当の居場所だと思う家、不自由な世界である<あそこ>との間で」揺れ動く。¹³ 彼は、軍隊こそ自分の居場所だと考えるが、意識が朦朧とする時、ナターシャがいる家こそが、彼の本質を構成する場として、つまり本来の居場所として思い浮かぶのである。この時、ニコライは意識的に回想しているわけではなく、過去が、記憶がおのずと意識に上る力を保っている。

¹³ *Густафсон. С. 298-300.*

つまり、この場面によって、記憶が現在と同じ力を持つことが示されているのだ。特に『戦争と平和』の主人公たちは、大人になっても幼年時代の生に等しい子供の特質¹⁴を備えたままであり、それが彼らに、チェーホフの主人公たちが依拠する立場とは独立した存在基盤を与え、生の刷新を可能にしている。イワン・イリイチのように、存在基盤を職務に依拠していた人物にあっても、揺らぐことのない過去を思い出し、幼年時代と同様に正しい生を生きる人物を下男のうちに見出した結果、生を刷新した上で、つまり精神的な死の状態を脱し、肉体的に死ぬことが可能となった。

『小犬を連れて奥さん』の主人公たちは、日常生活と自分自身の職務や家庭内の立場から解放された状況で出会うが、彼らは悠久の時間が流れる自然にとっては無縁なものとして描かれ、二人の存在基盤は危ういままである。

まだここに、ヤルタもオレアンダもなかった頃、下の方ではこのようにざわめいていたし、今もざわめき、我々がいなくなっても同様に、無関心に鈍い音をたててざわめき続けるのだろう。そしてこの不変性にこそ、我々個人の生と死に対する完全な無関心のうちにこそ、我々の永遠の救いの保証が、地上における生の絶えざる運動と果てしなく続く完全無欠の保証があるのかもしれない。夜明けに非常に美しく見えた若い女性の隣に座り、海、山、雲、広い空というおとぎ話のような情景に魅了され、心が安らいだ状態で、グーロフは、よく考えてみれば、この世のすべてが、我々が存在の至高の目的や人間の尊厳について忘れていた時に考えたり行動したりすることを除くすべてが美しい、ということについて考えていた。(10, 133-134)

ここで、人間の日常的な思考は、存在の至高の目的や人間の尊厳に対置され、後者は自然同様、美しいものとして捉えられている。トルストイの主人公たちは、自身のうちを保たれ続ける子供の特質や幼年時代の記憶、この遠い過去から集積された記憶という基盤を通して、自然や存在の至高の目的、人間の尊厳に触れる機会を持つ。それに対し、チェーホフの主人公たちは、こうした美しい世界と触れ合うことを可能にする内面的な基盤を持たない。チェーホフが、トルストイの信仰を身近に感じていながら、二人の作品の間に世界観の相違が生じた原因は、まさに人生を振り返る際、存在の基盤となる記憶があるか否かにあると考えられるのである。

¹⁴ トルストイの作品における「子供の特質」については、「レフ・トルストイの『戦争と平和』における子供の特質」(『ロシア語ロシア文学研究』第47号、2015年、81-99頁)で論じた。

Воспоминание в произведениях Л. Н. Толстого и А. П. Чехова

КАКУБАРИ Сильвия

Данная статья посвящена изображению воспоминания в произведениях А. П. Чехова и Л. Н. Толстого.

Герой повести Чехова «Скучная история» вспоминает прошлое, предчувствуя свою смерть. При этом его воспоминания, которые отличаются от того, что было на самом деле, не способны обновить его настоящую жизнь. Герой повести Толстого «Смерть Ивана Ильича» также испытывает в своей жизни разрыв между прошлым и настоящим. Впрочем, он смог восстановить смысл жизни и преодолеть духовную смерть под влиянием Герасима, который живет правильно и искренне радостно.

В отличие от этих повестей, у персонажей романа «Война и мир» настоящее и прошлое непрерывно связаны. Прошлое продолжает составлять сознание человека и в настоящем. Им даже не нужно вспоминать прошлое, так как оно постоянно продолжает существовать в настоящем в виде «детского». У этих героев постоянно присутствующее прошлое позволяет им прикоснуться к природе, высшим целям бытия и человеческому достоинству, тем самым обновляя их жизнь.